

熊谷市仏教会主催

柴又帝釈天と浅草寺を訪ねる日帰り旅行

十一月二十六日（水）
 朝八時 上之・龍淵寺集合
 十時半 柴又帝釈天本堂にて法話門前散策
 昼食 東武ホテルバント東京
 十四時 浅草寺本堂にて法話・散策
 十八時頃 上之・龍淵寺帰着・解散

会費 五千円
 申し込み 松岩寺へ
 ご注意 松岩寺住職は同行いたしません。

声を出して元気になる（中止）

9月24日 水曜日 PM1:30～3:00

九月二十四日に予定していた「声を出して元気になる」は講師の都合により中止します。



色づかない街

もしかしてこれを若い人が読んでいたら「誰、それ」と笑われてしまいますが、南沙織に『色づく街』という歌がありました。四十年前の歌です。こんな歌詞です。「あの日別れた駅に立たずみ／ああ青い枯葉かんでみたの／街は色づくのに／会いたい人はこない」

『色づく街』というタイトルが好きです。「町」ではなくて「街」なのもうれしい。温暖化できれいに色づくことがなくなるとはいえ、東京の絵画館前や大阪の御堂筋など、いつもは無愛想な大都会もこの季節だけは、色づく街に変身します。

熊谷だって……と、言いたいところですが、熊谷中心部の街路樹は市役所通りのケヤキ並木以外の大部分が、色づく直前に剪定して葉をもぎ取られてしまいます。落ち葉の清掃に費用がかかるし、汚いと苦情が寄せられるのかもしれない。事情は推測できます。理解できます。でも、寂しいな。熊谷は、色づかない街なのです。

松岩寺はというと、近所の方には迷惑をかけていますが、ケヤキに楓にイチヨウ。ばらばらひらひらと落ちてくれます。イチヨウには銀杏がなります。十一月中旬から実が落ちますので好きな方は取りに来てください。

ところで、墓地で時々お叱りをつけます。「隣の墓地の百日紅の花がおちてくる」とか、「近くの高木が倒れそつで心配だ」。あるいは、「垣根のヒバの葉が落ちる」などなど。染井吉野を伐採して管理棟を新設した時は、「桜の花びらが落ちなくなつてよかった」と、喜んでくれた人がいましたが複雑な心境です。「緑を大切に、自然を守ろう」と掛け声だけは立派ですが、本当に緑が好きなのだろうか、自然に心を寄せているのだろうかと疑います。

真夏の道を歩く人を、緑の陰でまもってくれた街路樹が、カラフルに着飾って色づこうとしている矢先に葉をつんでしまふ。そんな無粋なことをしている熊谷よ。だから街が色づかないし、「会いたい人はこない」のだ。緑を守って育てるには、少しばかりの我慢も必要ではないの！

不連続シリーズ「見つけた」

NHK朝の連続ドラマ『花子とアン』が人気です。八月の中旬に、花子の五歳の長男が疫癘を発病して、わずかに二晩で亡くなってしまふというシーンがありました。ドラマでは大正十五年という設定で、実話でもあるようです。

その三年前の大正十二年十月、関東大震災から五十日後にはやはり疫癘で三歳の女の子を亡くして悲嘆にくれる別の夫婦がいました。詩人の西条八十です。大正から昭和にかけて赤痢・疫癘が大流行して、多くの幼い命を奪ったといえます。

赤痢も疫癘も、現代日本ではほとんど経験するところがなくなつたけれど、当時は死がもつと身近で不可解なものであつたにちがいありません。だから、死を封じ込めるために、今は違つて忌み言葉や習俗がありました。

今日では消え去つた、そうしたことを収集した本に、『葬送習俗事典』（河出書房新社刊）があります。著者の柳田国男（1875～1962）は、「日本民俗学の創始者」です。もともとは昭和十二年に出版されたのが、復刊されて入手しやすくなりました。日本全国の葬礼にかんする方言を収録した本です。

八十年前に収録された習俗の多くは今ではなくなり、ことばも消え去りました。だから、この事典は「われわれの精神生活の根幹に迫る資料の宝庫」だといふのです。

さて、消え去ることばがあれば、新たに作られることばもあります。最近、強大な力で無理やり習俗と言葉を作つてしまいます。たとえば、二月の

街かどに禅を探し現代に仏教を見つける

不連続シリーズ



郵便局で売っていた「お盆玉」袋を

見つけた！

節分に、恵方の方角を向いて、巻き寿司を食べるなんて習慣は、いつ頃から誰が流行らせたのだ！なぞと憤慨してもしようがない。今度は、お盆が狙われたようです。お気づきの方も多いでしょうが今年の夏、郵便局に「お盆玉」袋なるポチ袋が売られていました。つまり「お年玉」のお盆バージョンなのだといふ。

数年前から「お盆玉」なる言葉を登録商標して、機会をつかがっていた某企業の努力の甲斐があつてか、郵便局の窓口に進出したのです。

努力の「甲斐」と書いたけれど、その企業の本社は山梨県にあつて、はじめは手漉き和紙の間屋だつたらしい。そして、事情通によると前回書いた「御仏前」袋を、はじめて作つたのもこの会社ではないかといふ。

昭和三十年に初版が出た『広辞苑』には、御霊前・御仏前の項目がないことも前回に書きました。平成三年の第四版になつて始めて出てくる、新参者の言葉なのです。

時代が変われば言葉も習俗も変わります。そのことを否定しているわけではありません。何者かが姿を隠して、商魂で新しい習俗をつくりあげるからご用心、と言っているのです。いつてみれば、新しい「言葉」の製造元が明記されてない「御仏前」袋は、ちょっと怪しい。怪しいとは普通ではないこと。みんながやっているから正常だと思つたら、ほんとうは異常なのです。誰かが「違つ」と声をあげねばと思つて、何度も書いてあるわけです。